

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03048

研究課題名(和文)古文書学の再構築 料紙と機能・様式との関係 -

研究課題名(英文)Reconstruction of Diplomatics -The relation between paper quality and function

研究代表者

漆原 徹 (Urushihara, Toru)

武蔵野大学・文学部・教授

研究者番号：20248991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：室町時代の古文書は、楮と雁皮に限定できること。「柔細胞」がほとんど認められない紙と、不純物(柔細胞)の除去が不十分な紙に大別でき、また填料(米粉)を含む紙と、含まない紙に大別される。この二つの分類を組み合わせると4つに分類できる。従来、古文書に裏打紙が施されたものは料紙を判断する材料とはなりえないとされていたが、裏打紙がある文書でも十分に繊維状態を知ることができるものが存在する。鎌倉幕府発給の政所下文では、惣領家と庶子家に発給された料紙は異なる。室町幕府発給の将軍御内書の料紙として、享禄3年までは檀紙系統の強杉原が用いられ、享禄4年から雁皮紙の「鳥の子」が使用されるようになったこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

佐藤・石井の「中世史料論」は「定説的古文書学」と評価されているが、その後機能論を強化する方向で形態論が、さらに形態論を発展させる方向で上島が提起した料紙研究が盛んに行われるようになった。特に富田を中心として展開した研究は、古文書料紙を徹底した科学的分析を手法とするが、科学的分析を追求するあまり紙素材全般を論ずる研究となってしまう。料紙研究を牽引してきた上島と富田の論争を発展的に融合させ、その成果を従来蓄積されてきた「定説的古文書学」と連結させることによって、新たな古文書学を再構築するものである。

研究成果の概要(英文)：An old documents from the Muromachi period is made of kozo or ganpi. It is divided into paper that does not contain soft cells and paper that contains soft cells. It also divided into fillers and non-fillers. When these two categories are combined, there are four categories. In the past, it was considered impossible to judge which of old documents was lined with paper. However, there is an old document with backing paper that can sufficiently know the fiber state. The documents issued by the Kamakura Shogunate differ from those issued between Head house and branch house. The paper in the Muromachi Shogunate was changed to that of Torinoko of the Ganpi line from 1531AD, however, the paper was changed to that of Suibara paper from Danshi line from 1530AD.

研究分野：日本中世史

キーワード：料紙 中世文書 楮紙 雁皮紙 将軍家下文 御内書 御教書 奉書

1. 研究開始当初の背景

日本古文書学の料紙研究の必要性を早くから説いて料紙研究を牽引してきた上島有の築いた体系に対して、富田正弘・湯山賢一を中心とする科学的分析を調査手法の核とする料紙研究は、主に料紙の歴史的名称についての見解を異なるものとして鋭く対立してきた。我々はこの問題点について、双方とも料紙の種類と使用される文書の様式の関連性では一致しており、根本的な相違はないという理解から料紙の分類と様式・機能との有機的な関係性を明らかにすることによって両者を融合させ、さらに新しい古文書学を提案できるものと考えた。

日本古文書学の研究は、前近代からの学問的連続性おしいる遺産が殆どなく、黒板勝美『国史の研究』で歴史学研究の補助学とされて以来、相田二郎、萩野三七彦、佐藤進一などを中心に学問的独立性が提起され、日本中世史研究の世界を中心として実証的研究成果が蓄積されてきた。黒板以来、相田二郎、中村直勝などによって体系化されてきた古代・中世の文書様式を中心とした古文書学を、機能論を発展的に様式論と融合させたのが佐藤進一『古文書学入門』である。これが佐藤・石井の「中世史料論」として現在「定説的古文書学」と評価されているが、その後機能論を強化する方向で形態論が、さらに形態論を発展させる方向で料紙研究が盛んに行われるようになった。特に1990年以降、富田正弘を中心とする古文書の料紙に関する研究は、長足の発展を遂げ大きな成果をあげている。富田を中心として展開した研究は、古文書料紙を徹底した科学的手法を用いて分析するもので、先行研究として高く評価されるもので、多くの料紙研究に影響を与えている。一方で、料紙の科学的分析に徹底するあまり、古文書学というより紙素材全般を論ずる研究となってしまうことは否めない。もとより紙を素材とする文化財は、古文書に限られるものではないから、前近代の紙素材全般を科学的に分析する富田らの研究手法は評価されるべきものである。しかし、こうした科学的料紙研究の成果を、従来の様式論・機能論と連結させることはまだできていない。本研究では、料紙研究を牽引してきた上島と富田の論争を発展的に融合させ、その成果を従来蓄積されてきた「定説的古文書学」と連結させることによって、新たな古文書学を再構築することを目指そうとするものである。

2. 研究の目的

本研究では、古文書がその「もの」として有する非文字列情報を、古文書上に書かれた文字とリンクさせることで、その有機的関連性を探ることであらたな研究対象とすることを目標とする。具体的には、特に重視する非文字列情報として近年長足の進展を遂げた「料紙論」に注目したい。料紙とくに中世古文書の料紙については、上島有と富田正弘との間に、その分類の名称を巡る激しい論争があるが、私たちは研究を通じてこの問題点とその発展的融合を次のように考えるに至った。

料紙が用いられる文化財は、正倉院文書から近世の地方文書に至る長い歴史と、古文書・典籍・聖教・絵画など多岐にわたる使用目的があり、さらには中国・朝鮮など東アジア全域における料紙と様式的関連性も視野に入れることが望ましいだろう。料紙文化財全般を、時間的・分野的・地域的に幅広く研究を行うという理想は、原材料や製法も多種多様で分類も容易ではなく、料紙個々の名称も史料的制約から容易に決しがたいことから現実的には困難であると思われる。

しかし室町時代の古文書に限定した場合は、その原料はほぼ楮と若干の雁皮に限定することができる。とくに中世後期の楮紙は、紙漉きを行う際、不純物を除去した結果、「柔細胞」がほとんど認められない紙と、不純物(柔細胞)の除去が不十分な紙に大別でき、また紙漉きを行う際透明度を落とすために入れられた填料(米粉)を含む紙と、含まない紙に大別される。

そこでこの基本的な二つの分類を組み合わせると、次の4種類に分類できる。

- a 不純物(柔細胞)も填料(米粉)も認められない紙
- b 不純物は認められないが、填料が入っている紙
- c 不純物は認められるが、填料は入っていない紙
- d 不純物も填料も入っている紙

このうち a が上島の言う第 類の料紙であり、富田等の言う歴史的名称としての「引合」に相当する。b は、上島の言う第 類の料紙であり、歴史的名称としては「杉原」が相当する。

c は、上島の言う第 類の料紙であり、歴史的名称としては「強杉原」が相当しよう。そして d は上島の言う第 類の料紙であり、いわゆる「雑紙」とよばれているものであろう。つまり室町時代の古文書に限定した場合、両者の主張には大きな相違はないと考えられる。このような料紙研究における上島有と富田正弘両者の主張の相違は、根本的には大きな相違がないと考えられることから、本研究によってその発展的な融合と新たな古文書学の体系化を構築しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究では、国宝・重要文化財に指定されている文書群である「上杉家文書」、「相良家文書」、「東寺文書」、「東寺百合文書」、「駿河伊達家文書」、「西山地蔵院文書」、「青蓮院文書」、「賀茂別雷神社文書」などを素材として、その料紙の繊維写真を撮影してデータとして蒐集すると同時に、古文書そのものの外観から手触り風合いといった感性的なものから中世の当時にその料紙が人々にどのように認知されていたかという点を明らかにしようと考えた。データ集積のために、古文書の撮影は、100倍率の顕微鏡を使用し料紙繊維の状態を撮影したが、花押や朱書きの部分も墨のない部分とともに記録した。料紙の深度を変えて撮影することによって、墨が料紙の種類別にどの程度しみ込んでいるかも調べることができた。また古文書全体の撮影に際しては極力料紙の手触りと風合いといった感性的なことも重視して記録して繊維写真との関連性に注意してデータとして蓄積した。将軍家下文・下知状・管領施行状・御教書・御内書など文書様式と料紙の関係性は当初からの中心的課題なので十分に留意して調書を作成した。正文と案文はもちろんのこと、惣領と庶子家に対する発給文書の料紙の紙質の際にも留意し、花押の署判が本紙の祐筆書き部分との墨色の違いなどにも注目して記録を取った。

4. 研究成果

研究代表者漆原徹と研究分担者岡野友彦は、上島有と富田正弘両者の料紙研究の発展的融合による新しい古文書学の体系化のために、平成23年度から同25年度まで、岡野友彦を研究代表者として「古文書学の再構築 - 文字列情報と非文字列情報の融合 - 」と題して、次いで平成26年度から同28年度まで「古文書の料紙と様式の有機的関連性についての史料学的アプローチ」と題して科学研究費基盤(C)の受託を受けて調査研究を行ってきた。さらにこの研究を継承して、平成29年度から令和元年度まで漆原徹を研究代表として、「古文書学の再構築 - 料紙と機能・様式との関係 - 」と題して科学研究費基盤(C)の受託を受けて、調査研究を進展させてきた。成果として、以下に簡略にまとめる。

室町時代の古文書に限定した場合は、その原料はほぼ楮と若干の雁皮に限定することができる。とくに中世後期の楮紙は、紙漉きを行う際、不純物を除去した結果、「柔細胞」がほとんど認められない紙と、不純物(柔細胞)の除去が不十分な紙に大別でき、また紙漉きを行う際透明度を落とすために入れられた填料(米粉)を含む紙と、含まない紙に大別される。

そこでこの基本的な二つの分類を組み合わせると、次の4種類に分類できること。

- a 不純物(柔細胞)も填料(米粉)も認められない紙
- b 不純物は認められないが、填料が入っている紙
- c 不純物は認められるが、填料は入っていない紙
- d 不純物も填料も入っている紙

このうち a が上島の言う第 類の料紙であり、富田等の言う歴史的名称としての「引合」に相当する。b は、上島の言う第 類の料紙であり、歴史的名称としては「杉原」が相当すること。c は、上島の言う第 類の料紙であり、歴史的名称としては「強杉原」が相当していること。そして d は上島の言う第 類の料紙であり、いわゆる「雑紙」とよばれているものであることなどを明らかにした。

中世当時の人々の認識としては、上島のいう 類と 類はほぼ同じものとして認識されており、特に品質の優れた紙は皇族や上級公家の私信に用いられており公文書には使用されていないこと。また幕府発給文書は 類か 類の料紙が用いられていること。

次に従来料紙研究においては、成巻されたものはもちろん古文書に裏打紙が施されたものは料紙を判断する材料とはなりえないという古文書学上の常識が存在した。この点について、補修作業が終了した直後の「賀茂別雷神社文書」と江戸時代中期に裏打紙が施された「相良家文書」に関して、料紙の100倍率顕微鏡写真撮影を行って繊維の状態を調査した結果、十分に料紙を判断することが可能であることを確認できた。今後の料紙研究に際して、一切手が加えられていない限られた古文書だけで研究する限界性を考慮するとき、裏打紙が施されていたとしても十分に繊維状態を知ることができるものが存在したことを明らかにすることができた意義は大きい。

鎌倉幕府発給の政所下文では、惣領家と庶子家に発給された料紙は異なり、惣領家に発給された料紙の方が上質であった。

室町幕府発給の将軍御内書の料紙として、享禄3年までは第 類すなわち檀紙系統の強杉原が用いられ、享禄4年から雁皮紙の最上質紙である「鳥の子」が使用されるようになったこと。

以上箇条別に列挙したように個別具体的な事実を明確にする成果を得ることができた。これらの成果は、吉川弘文館から刊行予定であるが、すでに一部を『藝林』第69巻1号誌上で発表している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 廣瀬裕之 漆原徹 遠藤祐介	4. 巻 4号
2. 論文標題 奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究 - 正面銘文として刻された書	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 武蔵野教育学	6. 最初と最後の頁 127 ~ 140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬裕之 漆原徹 遠藤祐介	4. 巻 6号
2. 論文標題 奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究 左側面銘文として刻された書と成立過程	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵野教育学	6. 最初と最後の頁 120 ~ 134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田卓司	4. 巻 50号
2. 論文標題 観応の擾乱期の恩賞宛行	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文化史研究	6. 最初と最後の頁 145 ~ 157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岡野友彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 216
3. 書名 源氏長者 武家政権の系譜	

1. 著者名 花田卓司他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 洋泉社	5. 総ページ数 218
3. 書名 後醍醐天皇	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2019年9月26日、福井市で開催された藝林学会の招待を受けて、本科研のメンバーで参加した。研究分担者岡野友彦が本科研の研究成果について報告し、漆原が討論の司会として、料紙研究と和紙研究の関係と本科研の意義について解説した。現在の料紙研究の動向は、紙素材研究として精緻を極めた科学的分析に偏りすぎており、本来の古文書学的料紙研究の大前提だったはずの紙の種類と文書様式との関係について明らかにしようとする研究から離れている現況に問題提起した。総合的な成果発表として吉川弘文館からの刊行を行うことが決まっているが、すでに個別の成果を研究分担者の花田卓司が藝林に発表した。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	岡野 友彦 (okano tomohiko) (40278411)	皇學館大学・文学部・教授 (34101)	
研究 分担者	神野 潔 (jinno kiyoshi) (40409272)	東京理科大学・理学部第一部教養学科・教授 (32660)	
研究 分担者	花田 卓司 (hanada takuji) (60584373)	帝塚山大学・文学部・准教授 (34601)	